

動物疾病学・概要

		シラバス(概要)
授業名	動物疾病学	チーム獣医療の場で必要な病名や診断名について学習する。また、治療方針の理解度を高め、疾病別の動物看護に活かすために必要な疾病について学ぶ。器官別の疾患については、特有の検査や動物看護に必要な知識を学び、動物の看護を实践できるような知識を身に付ける。疾患によっては、好発種や、好発年齢があるので、そのポイントを把握した上で各症状を理解し、動物への看護や飼い主の指導に活用できるようにする。
自律学習時間	30時間 (14科目合わせて)	評価方法
作成者	テキスト作成WG	30時間の自律学習修了した後に、対面授業20回を実施(20回×3時間=60時間)。各科目の初授業時間時に自律学習理解度確認テストを実施する。
参考図書	疾患別 動物看護学ハンドブック(日本獣医生命科学大学獣医保健看護学科臨床部門著編 緑書房) 専門分野 臨床動物看護学各論(全国動物保健看護系大学協会カリキュラム検討委員会編 インターズー) 動物看護コアテキスト6 動物看護の実践(ファームプレス) など	
50分/コマ	科目名	概要
1	概論	動物の生命維持の仕組みと、解剖学及び生理学の基礎を知り、生命体としての動物を理解できるようにする。動物病院での臨床において、あらゆる診療知識や技術の基本となるのが解剖学と生理学の知識であり、また、内科学及び外科学などについて理解する際にも、解剖学や生理学の知識は必要不可欠であり、それらを正しく理解し、診療チームとしてより有効な動物看護ができることを目指す。臨床において多くなりつつあるがんについてその症状、病態生理を学ぶことにより疾患を理解しがんについての基礎知識を持ち、担がん動物の看護に活かす。 高齢動物の特徴を理解し、高齢期の対象特性と身体の変齢変化、それに伴って安全な生活環境への支援について学修する。
2	皮膚 I	皮膚、被毛、羽毛、鱗、爪、皮膚腺とそれらの生成物(汗、皮脂、粘液)をまとめて外皮系とする。今回はこの中から皮膚に関連する事項について学習する。外皮系は動物のもっとも大きい器官系で、動物を外界から守るはたらきをすると同時に、まわりの環境に関する情報を脳に伝える役割をはたしている。ここでは皮膚の組織構造について形態を知り、機能について学習する。皮膚表面は頑丈な角質層でおおわれているため、傷がないかぎり、ほとんどの微生物は皮膚から体内に侵入することはできない。また、皮膚表面は酸性の皮脂が分泌されているためにほとんどの細菌が定着・増殖しにくい環境となっている。それとともにその環境に適応した種々の細菌が皮膚表面に生息しておりこれらが相まってあらゆる微生物の体内への侵入を防ぐ非特異的防御機構としてのしくみとなっている。皮膚病の特徴的な症状を早期に見つけるための、観察ポイントがあることを学んだ上で、代表的な皮膚疾患の症状、治療、検査法について学習する。
3	皮膚 II	皮膚病の観察ポイントから皮膚病の所見をとらえる。ここでは重要度の高い寄生虫疾患である疥癬と毛包虫症、アレルギー性皮膚疾患の皮疹が生じやすい部位、特徴、特異的な症状、検査法について学習する。また、看護時と日常生活での配慮、看護アセスメントを学び家庭生活指導に活かす。 ・疥癬 ・毛包虫症 ・ノミアレルギー性皮膚炎 ・犬アトピー性皮膚炎 ・膿皮症
4	口腔関連 I	口腔関連疾患は口腔内環境だけでなく全身の容態に影響を及ぼすことが大きい。その多くは栄養摂取障害、消化器疾患につながる。ここでは口腔内に付随する周辺の解剖を見直し、特に歯の構造と機能、食物を咀嚼する口腔環境について学習する。代表的な疾患として猫の歯肉口内炎、歯周病の症状・病態生理について学び獣医師が行う治療について理解を深めると共に、家庭で飼い主が実施できる口腔内ケアについて指導ができるために必要な知識を習得する。
5	口腔関連 II	・歯の発育障害 ・歯の萌出障害、交換異常 ・不正咬合 ・歯の損傷 ・感染性疾患 ・歯周病 ・唾液腺の疾患 ・(口腔内腫瘍)
6	血液・免疫 I	血液成分の概要を理解し血液疾患の特徴、症状を知ること目標とする。血液に関連する疾患を知る前に基礎知識として血液成分とそれぞれの働きを学ぶ。特に白血球のおもな役割の一つは体内に侵入した細菌やウイルスなどの異物を殺滅し、身体をまもることであり、もう一つの重要な役割は老化した細胞や奇形の細胞を発見し破壊することであることを復習する。また、特異的防御機構の免疫としてリンパ球が関与する生体防御機構について学習する。 ・血液の組成 ・血液の機能 ・赤血球 ・白血球 ・血小板 ・血漿タンパク質 ・血液の凝固と繊維素溶解 ・血液型 ・輸血と検査
7	血液・免疫 II	生体防御機能について学ぶ。その上で生体防御機能障害をおこす疾患について知り、症状・検査・処置・治療について概要を学び、その知識を看護時に活かせるようにする。生体防御機能障害をもつ動物への看護過程の展開について学ぶ。 ・アレルギー性疾患 ・自己免疫性疾患 ・猫免疫不全ウイルス感染症 ・猫白血病ウイルス感染症 ・免疫介在性溶血性貧血

動物疾病学・概要

8	整形外科 I	<p>整形外科疾患は、運動器の機能障害によって生じる。運動器とは動物の体の動きを司る機能を有する部位の解剖学的・機能的名称のことで、骨、軟骨、関節、筋肉、腱、靭帯から構成される。これらの複数の組み合わせにより、それぞれの部位において合理的な運動が可能となる。運動機能障害とは、このように体を支え、動かす部位に生じる異常のことで、生じる症状は神経機能障害と類似することも少なくない。ここでは運動機能障害のメカニズムを知り、機能障害による症状を学習する。また、運動機能障害に対する治療は外科的療法が多く、根本治療を行った後に可能な限り早期から実施するリハビリテーションについて概要を学習する。</p>
9	整形外科 II	<p>運動機能障害を起こす代表的な症状・疾患とそれらに関する治療について学習し、家庭での動物の生活について飼い主に指導する際に活かし、看護に活用できるようにする。 ・膝蓋骨脱臼 ・前十字靭帯断裂 ・変形性関節症 ・レッグペルテス病 ・捻挫 ・骨折 など。</p>
10	消化器 I	<p>栄養摂取・代謝機能の障害について、その症状、病態生理を学ぶことにより疾患を理解し、必要な検査・治療・処置に関する基本的な知識を修得する。また、栄養摂取・代謝機能障害に関する知識をもとに症状、検査、動物に対する看護方法や看護過程の展開方法に活用する。消化器系とは食物を消化、吸収するための一連の器官をさす。一般的には消化器に付随する膵臓、肝臓をふくめて消化器系と呼ぶが今回は、膵臓・肝臓については異なる回で学修する。消化器系疾患は動物病院でみる機会の多い疾患で、軽度のものから命にかかわるものまで非常に多岐にわたっている。また、障害は長期的には栄養状態の悪化を招き、二次的な生態防御機能障害や神経・運動機能障害、排泄機能障害、繁殖機能障害など多くの生理機能障害を引き起こす。ここでは消化器の局所解剖を見直し、消化器のしくみとはたらきを知ったうえで消化器の障害によって生じるさまざまな症状を知る。</p>
11	消化器 II	<p>特異的な栄養摂取・代謝障害の症状を知った後に、診察と診断の流れを知る。動物看護師は消化器障害がある動物が診察を受けている時には対象動物にストレスを与えることの無いよう注意しながら様子を観察できることが重要である。嘔吐や吐きだし、排便の様子と便の形状などは診断に結び付く重要な観察事項であるためその特異的な様子を熟知する必要がある。また、獣医師が診断するために必要な検査について知識を修得する。治療内容の理解ができるよう消化器障害がみられる時の代表的な薬物療法、輸液療法、食事療法、非経口的栄養補給についても学修し動物の看護と飼い主指導に活用できるようにする。 代表的な疾患 ・食道狭窄 ・巨大食道症 ・胃拡張胃捻転症候群 ・腸炎 ・腸閉塞(イレウス) ・胃内異物 ・パルボウイルス感染症 ・寄生虫感染</p>
12	肝臓・膵臓	<p>消化器系の障害はさまざまな症状を引き起こす。その多くは消化器疾患に特異的なものではなく、内分泌疾患や腎疾患なども消化器症状を起こしうる。特に消瘦および体重減少は小腸の吸収不良ばかりではなく膵臓疾患による消化不良が原因となつて起こる。また、肝細胞が急性に傷害されることによつて消化器症状を生ずることがある。特に中毒性の原因には化学薬品や自然毒、医薬品などあらゆる物質がふくまれ感受性には個体差があるため臨床症状にも大きな差が出る。感染の原因としては犬伝染性肝炎、レプトスピラ症などが知られている。 代表的な疾患 ・犬の肝炎(急性、慢性) ・猫の肝リポドーシス ・門脈体循環シャント ・膵炎</p>
13	脳神経系	<p>神経機能障害について、その症状、病態生理を学ぶことにより疾患を理解し、必要な検査・治療・看護に関する基本的な知識を修得する。また、これらを基に症状、検査時の補助、動物の看護、飼い主指導に活用できるようにする。体を動かしその統合性を司る神経系疾患は、動物の日常動作やQOLの維持において大変重要である。動物の高齢化や飼育形態の変化さらに獣医療技術の進歩は、これら疾病の発生状況、管理形態へ大きな影響をおよぼしている。多くの疾患は完治が非常に困難であるが、このような疾患をもつ動物の看護においては、動物看護師として疾病について理解が必要であるばかりでなく、飼い主の理解や継続的な協力が不可欠なために指導できるようより深い理解が必要となる。脳、中枢神経、末梢神経のしくみを復習し、これらに機能障害がおきた時のさまざまな症状を知る。その上で、神経機能要害の診察と診断の流れを学修し、神経機能障害により失われたもしくは減弱した機能を可能な限り元の状態にもどるためのリハビリテーション概要について学修する。 代表的な疾患 ・水頭症 ・ウオブラー症候群 ・椎間板ヘルニア ・馬尾症候群</p>
14	眼科	<p>感覚機能の障害について、その症状、病態生理を学ぶことにより疾患を理解し、必要な検査・治療・看護に関する基本的な知識を修得する。動物は熱い、冷たい、痛いなどさまざまなことを感じたり、眼や耳を使って物を見たり、音を聞くことができる。感覚として外界の刺激を身体の特定期官(感覚受容器)が感じ取り認識する。ここでは眼について基本的局所解剖を復習し、眼の疾患について知る。代表的な疾患 ・眼瞼疾患 ・結膜炎 ・角膜炎 ・角膜潰瘍 ・ブドウ膜炎 ・白内障 ・緑内障 ・チェリーアイ ・水晶体脱臼</p>
15	耳科	<p>耳の疾患は、一般診療で遭遇する病気の中で頻度の高い病気で、その中でも外耳炎が多くを占める。動物の外耳の解剖を復習した上で、その症状を熟知し治療に補助ができるようになる。耳科診療で行われる検査を知る。 代表的な疾患 ・外耳炎 ・中耳炎、内耳炎 ・外部寄生虫(ミミヒゼンダニ) ・耳血腫 ・耳の腫瘍</p>

動物疾病学・概要

16	循環器	<p>循環機能の障害について、その症状、病態生理を学ぶことにより疾患を理解し、必要な検査・治療・看護に関する基本的な知識を修得する。また、これらを基に症状、検査時の補助、動物の看護、飼い主指導に活用できるようにする。循環器系疾患は、命に直結する疾患が多く、長期に治療管理を行っている場合でも、急な症状の変化に注意する必要がある、動物看護師として理解を深めておく必要がある。循環機能とはすなわち、心臓のポンプ機能により全身へと送り出された血液が全身の諸臓器をめぐる再び心臓へと還ってくることを指す。これに係る解剖学的知識とガス交換の過程など生理学的知識の復習をする。循環機能障害とはこれらの過程のいずれかに障害が生じていることを意味し、その原因や症状は多岐にわたる。これら循環機能障害の意味をよく理解した上で原因となる病理学的変化について学修し、診察と検査について携われるようになる。循環機能障害に対する治療は、薬物療法を代表とする内科的治療と手術による外科的治療に大別されるが、付随して食事療法や安静療法も挙げられる。左心系、右心系、その他の循環器障害にわけて学び、先天性と後天性疾患に分けて学ぶ。</p> <p>・先天性疾患 ・僧帽弁閉鎖不全症 ・心筋症 ・不整脈 ・犬糸虫症(フィラリア症) ・急性フィラリア症</p>
17	呼吸器	<p>呼吸機能の障害について、その症状、病態生理を学ぶことにより疾患を理解し、必要な検査・治療・看護に関する基本的な知識を修得する。また、呼吸器疾患は命にかかわる問題を起していることが多く、急変する場合があるため状態を良く観察し、緊急の処置が行えるよう準備できる必要がある。症状をよく知り、診療時の保定や補助時に呼吸器機能障害を起している動物を早期に発見し、正しく報告できるようにする。検査時の補助、動物の看護、飼い主指導に活用できるようにする。呼吸とは、代謝に必要な酸素を大気中から摂取し、血液中に取り込むと同時に、代謝によって産生された二酸化炭素を対外に放出することである。呼吸機能障害とは、ガス運搬機能とガス交換機能が妨げられることであり、その原因は多岐にわたる。ガス運搬を妨げる原因となるのは気道および肺における疾患。ガス交換を妨げる原因となるのは肺組織の疾患によることが多い。呼吸器に係る局所解剖を理解した上で呼吸の生理を復習し、代表的疾患を学ぶ。</p> <p>・肺炎 ・肺水腫 ・胸水 ・犬伝染性気管気管支炎 ・猫の上部気道疾患 ・気管虚脱 ・短頭種気道症候群 ・猫の喘息</p>
18	生殖・繁殖	<p>繁殖機能の障害について、その症状、病態生理を学ぶことにより疾患を理解し、必要な検査・治療・看護に関する基本的な知識を修得する。基礎知識として正常な雌の発情、妊娠、分娩など繁殖について理解する。繁殖が一時的あるいは永続的に停止あるいは障害された状態を繁殖機能障害という。繁殖機能障害の原因は、飼育または飼育環境の不良、管理の不備、栄養障害、感染症、全身性疾患、生殖器の解剖学異常、各種ホルモン分泌の失調、または交配の不適などきわめて多岐にわたっている。雌における繁殖機能障害は発情周期異常、妊娠の異常、生殖器の異常、乳腺の異常などが原因となる。雄における繁殖機能障害の原因には交尾ができない身体的異常や正常な授精が成立しない、などがある。</p> <p>代表的な生殖器疾患 ・子宮蓄膿症 ・偽妊娠 ・潜在精巢 ・前立腺肥大症</p>
19	泌尿器系	<p>泌尿器系とは尿の分泌と排泄、生体にとって不要な代謝物を対外へ排出する器官のこと。腎臓、尿管、膀胱、尿道から構成される。これらの基本的解剖、生理学の知識を復習した上で排泄機能の障害について、その症状、病態生理をまなぶことにより疾患を理解し、必要な検査・治療・処置に関する基本的な知識を修得する。また、排泄機能障害に関する知識をもとに、看護の展開方法を修得する。さまざまな哺乳類は、食べることによって口から食物や水分を摂取し、呼吸によって空気を体内に取り込んでいく。消化・吸収できなかった残りや過剰なものは体外に排出される。また、代謝され利用される際にさまざまな老廃物が産生され、これらの老廃物も身体の外に排出される必要がある。これらの物質を体外に排出することを排泄という。排泄機能障害とは、通常何らかの原因により排尿や排便に異常が認められたり、困難になったり、意図としない排尿や排便がおきる状態をさすがここでは排尿機能障害について修得する。排尿機能障害は前立腺肥大、会陰ヘルニアなどによって生じる。腎不全では腎機能低下に伴い尿量の変化が生じる(多尿、乏尿、無尿、回数の変化)。腎不全、尿路感染症、FLUTD、尿石症。これらの疾患について症状を知り、動物の看護に活かす。高齢の腎疾患をもつ猫では長期にわたる看護が必要となることが多く、飼い主の精神的経済的支援も大きな課題となっていることを知る。</p>
20	内分泌系	<p>内分泌系とは、細胞が血中に生理活性物質(ホルモン)を分泌し、それを標的細胞がうけとることで作用するしくみのこと。これに対して外分泌がある。ホルモンは現在では「生体内における細胞間の情報伝達物質」と定義されている。ホルモンは生体の恒常性(ホメオスタシス)を維持するために必須であり、その過剰症や低下症は動物の健康状態にさまざまな悪影響をひきおこす。内分泌系を理解するためには、ホルモンがどのような影響を生体に与えているのかを知ることが重要である。そのため各臓器から分泌される代表的なホルモンの名称とその作用を理解することが重要である。そのうえで主な疾患名と症状について知識を身につける。内分泌系疾患の検査法について知り、各疾患の看護上のポイントを理解する。視床下部・下垂体、甲状腺、上皮小体、副腎の仕組み、病気、検査、看護について理解する。尚、膵臓は「肝臓・膵臓」科目で勉強する。</p>